

# 議事概要

## 令和5年度 新潟市放課後子どもプラン推進委員会

---

日 時： 令和6年2月13日（火） 午後3時00分～4時30分  
場 所： 新潟市芸術創造村・国際青少年センター 4階 多目的スペース2  
出席者： 新潟市放課後子どもプラン推進委員  
          加野委員、川口委員、長谷川委員、山田委員、脇野委員  
          事務局  
          地域教育推進課長ほか2名  
傍聴者： なし

---

### 1 開会

### 2 地域教育推進課長あいさつ

### 3 委員自己紹介

### 4 委員長、副委員長の選定

### 5 議事

#### (1) 令和5年度事業実施状況及び今後の取組について

(事務局) 案件概要説明

(川口副委員長)

子どもたちにはとても楽しい場所になっていて、もう少し豊かにできればいいと思う。最近中学生が来てくれて、小さい子の面倒を見てくれるという姿がある一方で、ずっと参加してくださっているベテランの皆さんが、プラスの思いは十分もちながらもそろそろ体が心配になるという状況をどうするか課題がある。

かといって保護者は、仕事があるなど参加は簡単ではない。PTA活動の一部という考え方というものもあるが、いろいろ調整や合意形成をどうするといいいのか。

父親が土曜日、小さい子を連れてきて、そのまま遊んでくれたりすることもあるので、関わってくださる皆さんとつながっていくという探し口も一つあるように思う。

(長谷川委員)

PTA役員の方に、役割分担として部ごとに月の担当をしていただいて、月・水、イベントがあれば土曜日というように運営に関わっていただくことにしてある。PTA自体を役員制ではなくボランティア制にしてほしいという声も上がっている。役員に割り振る

ことが難しいのは川口先生と同じように感じているが、その原因はやはり「関心がない」こと。

子どもたちは楽しくて遊びに行っているけれど、実際、それがどういう場所で、どういう遊び方をしている、どういう人たちが運営しているかというのを全く知らない。PTA総会でも一応紹介はするが、保護者がふれあいスクールを見に来ることがないので、なかなか関心を引くのが難しい。

課題は、いまだにPTAは母親の役割という固定観念がすごく強いこと。関心がある父親は参加してくれるが、大多数の家庭が役員をするのは母親、PTAに関わるのは母親、学校のことは母親と、父親たちは出番がすごく少ない。むしろ父親たちが来てくれると子どもたちはすごく喜ぶので、そこら辺が一つの課題である。PTA、学校のことイコール母親に関わるものという固定観念をどうやって打破していくか。ふれあいスクールのボランティアやスタッフを増やしていく上で課題の一つとずっと感じている。

(山田委員)

木戸小のふれあいスクールは、スタッフ不足であるが、毎回10人ぐらいいは来てもらっている。ただ、高齢化の傾向はあるので、後任の人たちはもう確保してある。定年が近いPTAのOBには、休日に畑を耕してもらうなど徐々につながっている。来週は豆まきをやる。

今年こそは餅つきを復活させたいと思っていたが、できなかった。餅つきにはOBがいつも来てくれるので、その方たちにつながっていくという期待と、一人が一人を連れて来ることを目標に、新しい方たちも少しずつ入っている。

他校の情報では役員の分担による当番制があると聞かすが、負担になるから最初からやっていない。

1年生が入学してすぐはふれあいスクールに参加していないが、5月の連休明けから参加する。その前に生活科の授業で地域との関わりの時間を取って、そこでふれあいスクールの練習をしている。そのときには、保護者に参加を呼び掛けている。たくさんは来ないが10人くらい来るので、そのときはチャンスだと思い、ふれあいスクールにお子さんたちと来てくださいと言ってお誘いをしている。

コロナ禍でふれあいスクールの休止期間はあったが、水曜日は全校児童400人に対して150人、70人という子どもたちが参加してくれて、土曜日は50人から70人は来ている。今は、水曜日は密になってしまうため、土曜だけやっている。それでも時々休むときがあるが、そのときはひまわりクラブにふれあいスクールのスタッフが行き、少し遊ばせてくれたりしている。

(加野委員)

前は区の社会福祉協議会で勤務していたのでボランティアセンターの業務にも関わりがあったが、今年からひまわりクラブの業務に関わるようになった。

結構、地域にはボランティアをしようと思っている方々がいるし、はじめの一歩として、学校のボランティア、子どもに関わるボランティアは、割と人気があるところではある。ボランティアを募集していることがどこまで伝わっているか、自治会で募集しているとい

うよりは、自治会に興味がないから関わらないでいたいという人たちもいるので、ボランティア募集の仕方もしろいろあったらいいと思う。

学生が子どものボランティアに参加したいと来ること多い。コロナ期は高齢者施設でのボランティアは難しかったので、受け入れ先としてふれあいスクールというのがあって、子どもの見守りや、一緒に遊んでほしいと思った。

ぜひ、各区の社会福祉協議会のボランティアセンターと情報交換していただきたい。もうすでにしているところは、たくさんあると思うが。

(事務局)

保護者の関心を高めようと苦勞している学校が多く、当番の在り方を協議している学校もある。アイデアとして、就学時健診でふれあいスクールをやることができれば、1年生で入ってくる保護者にそこで見てもらうという話し合いをしてきた学校もある。

なかなかPTA世代を巻き込むことが難しい。PTA会長、副会長が合意したところは割とスピード感をもって進むことはあるが、温度差や意識差があり、一度様子を見てもらうことの壁がある。

社協のボランティアセンターも興味深い取組である。学校としても安心してボランティアの紹介ができるので、非常に可能性があると思う。

(山田委員)

秋に、木戸小学校区にあるこども創作活動館のお祭りがある。木戸小、牡丹山小、竹尾小にボランティアの依頼があり3校で5人ずつ割り振ったが、こども創作活動館から東区社協にも声掛けしたら、3、4人のボランティアが来てくれた。ふれあいスクールの場合は、大人のボランティアは校区の人に限られるが。

寺山公園のお祭りのときは、社協を通じて学生のボランティアが結構来る。そういうところに行って、ふれあいスクールのボランティアを募集するのも一つだと思った。

(事務局)

学生も学ぶところが多いと思う。子どもと授業以外に関わることができてうれしかったという率直な思いを聞いた。学生にとってもニーズはあるので、マッチングが課題である。

新潟大学に当課の職員が出向き、興味のある学生に集まってもらい昼休みに説明している。新潟医療福祉大学も地域に関わってくれているので、本当にありがたい。学生は友達同士でなくても、個々でもボランティアに来てくれる。ふれあいスクールを直接参観しているが、新潟医療福祉大学の学生は登録して来ており、スタッフも本当に助かっているようだ。

地域への密着度は大学や学校で異なり、学生のボランティアが入るか入らないかという差になっている。

(川口副委員長)

学生も移動手段が必要なので、気持ちはあっても行けないなど物理的な条件が邪魔をしており、区による差を如何ともし難くじれったい。

体力のある学生たちが本気を出して遊んでくれると子どもたちも喜ぶ。いろんな方と関わるができるのは魅力の一つだと思うので、区による差を解消する方法はないものか。

(事務局)

新潟大学のある学生団体は、何人かのグループと各学校がマッチングできれば、そこに車で行って簡単な活動とかイベントを行っている。車で動けるような団体があれば、ぜひ何かの機会に活用していただければと思う。

学生が来て子どもたちと遊ぶことを、ふれあいスクールのスタッフが保護者に声掛けした。保護者も、目新しい企画で学生が何やってくれるのだろうと期待し、最初は写真を撮りながらだったが、最後は学生と一緒に考えてたり物を作ったりした姿もあった。

(山田委員)

自治協議会で新潟県立大学の学生とワークショップを行ったときに、木戸小学校に来てもらえないかと話したら一時来てくれた。

子どもたちは何か芸能人が来たみたいな感覚で、学生たちが大好きである。

(長谷川委員)

寺山公園での地域のお祭りで、社協のボランティアセンターを通して新潟東高校と新潟北高校のボランティア部にボランティアの要請をした。去年は10月に行ったが、東高校から10名、北高校から10名来てくれて子どもたちと上手に関わってくれた。新潟東高校は校区内にあり小学校OB、OGもいると思うので、逆に自分の母校にまた行きたいという生徒を巻き込めるといいと思った。

(事務局)

ふれあいスクールのことをホームページで見て、どんなふう to 実施校を探せばいいのかという問合せの電話を時々受けるが、移動できる範囲を聞いて学校につなぐこともある。ふれあいスクールで育った子が、戻ってきてやりたいということもあるので、ぜひそういった機会も生かしていければと思っている。

そこに保護者も巻き込んで関心を高めていけるといい。保護者のそういった活動への意識の差というのはあると思うが、市P連としてはどんなふう to 捉えているか。

(長谷川委員)

市P連の研修会参加者はPTA会長、副会長や関心のある方たち、運営委員長などが多い。学校に戻っていかに保護者に伝えられるかが難しい。PTA総会はほとんど委任状なので、紹介もなかなか難しい。授業参観のあとの学年、学級の保護者懇談会のときにふれあいスクールをすればいい。

(川口副委員長)

いつもだと校長や教頭が図書館で子どもたちを預かっているが、たまたま今回水曜日のふれあいスクール実施日にかぶせて、懇談の間、子どもたちにはそこで遊んでもらった。

(長谷川委員)

来年度ふれあいスクールを一部、PTAのボランティア制に移行しようと考えており、試しに保護者全体に募集をかけてみる。それで、ふれあいスクールを見にいこうという方が一人でも二人でもいれば周知になる。

役員の当番制はかなりの負担となり、仕事をしていると難しい。ボランティア休暇が設けられていても、ほとんどの方が有給休暇を使っている。有給休暇を取って学校にボランティアで行くと嫌な目で見られるという声も上がっている。保護者を巻き込まなければいけないが、どこまでできるのだろう。

(事務局)

平日は難しいので、土曜日に設定した学校もある。

(山田委員)

先週の研修会の情報交換で驚いたことは、土曜日に開催しているところが減ったこと。水・土にやっていたが、今は密になるから土曜だけ時々休んでいる。

始めた頃には、子どもたちだけでなく大人と関わる子どもの居場所の確保が目的であり、特に土曜日に力を入れたという話を聞いていた。

(事務局)

土曜日はふれあいスクール当番が携帯電話を持ち、けがや事故に対応している。一方、ひまわりクラブとの連携の在り方についてもご意見を頂けるとよいのかなと思う。

(脇野委員長)

児童数が減っているが参加者数は下げ止まっていて、参加率は増えているはず。何年もやっているのに、ある程度認知され、もう少し浸透しているようなイメージがある。

(長谷川委員)

認知してもらうためにふれあいスクールのお手紙を、昨年度までは1か月に1回出しており、ボランティアスタッフが足りないから募集することも書いてある。利用している子はひまわりクラブに行っている子が多い。ふれあいスクールで遊んでからひまわりクラブに行くため、保護者にとってはふれあいスクールに参加したというより、ひまわりクラブに行く前にちょっと学校で遊んだという感覚でしかなく、ふれあいスクールという認識では実はなかったりする。

運営しているスタッフがPTAや地域の方たちだというのもよく分かっていないというところが、浸透しないことの一つでもある。

(川口副委員長)

教育委員会とPTAの共催、事業自体の運営主体が知られていない。

(加野委員)

ひまわりクラブは利用料を払ってサービス利用しているという感覚でいるので、一緒くたになって、ふれあいスクールがボランティアで運営されていることは分からないかもしれない。

地域のボランティアが入って一緒に遊んでくれて時間を過ごしているというのが、ひまわりクラブと分離されておらず一緒になっている。

(脇野委員長)

皆さんが努力や工夫をしているのがとても理解できる。手紙を出したから読んでいる訳でもないし、理解しているという訳でもないので、伝えきれないというのはある。

コミュニティ・スクール(CS)の学校運営協議会で地域の影響力がある人たちにどんどん浸透させてもらって、そういう人たちから広げてもらうなどしないと、この構造はいつまでも変わらないのかもしれない。

校長先生からも少しずつ話題にさせていただくのはいいことだと思う。それは行政のほうからお願いできることかと思うし、やっているのだと思う。学校の管轄ではないが、子どもたちにとっては大事なところなので、言えるようになるといいと思う。

(事務局)

今、CSを走らせる部分に主眼があって、ふれあいスクールはこれからしっかり話題に入れていかなければならない部分だと思っている。特定の方ががんばるのではなく、地域総がかりで地域の子どもの育てていく、「地域のみんなで」ということは、学校に言っていく。

手紙などはやはり限界があり、地域全体として子どもをどう育てていくかという部分については、しっかり向き合えないとだめだと思っている。貴重なご意見として受け止めたと思う。

(山田委員)

CSの会議と運営委員会を一緒に、ということもできるのかと思って資料を見ていた。

(事務局)

学校運営協議会の中で、時間帯を決めてふれあいスクールの運営委員会を行っているところもある。そのような場には、当課の指導主事も参加している。

1回でやるとそれぞれWIN-WINになり、さらにまた周知にもつながる。

CSについて、パートナーシップ事業やふれあいスクール事業のスタッフが、時間を区切って入っている学校もある。

(山田委員)

木戸小学校は、コロナになってから今年度もPTAが休止している。

ふれあいスクールの運営委員会に出てくださいとPTAに頼んだが、誰も出られなかった。運営委員長は最初、地域の方で、PTAに移行しPTA会長が運営委員長になったが、

今年度、やむなくまたいつも来てくれている地域の代表に戻った。

(脇野委員長)

先ほどの「ボランティアをもっといっぱい」とは、主にどのような人を考えているか。

(長谷川委員)

今、PTAの役員が当番でふれあいスクールのボランティアに入っているのですが、その負担を減らすために、ふれあいスクールのボランティアとして動いてくれる方を募集しようとしている。

(山田委員)

ボランティアはいつも足りないが、新しい方たちも入ってきているし、呼び掛けると来てくれる。今度また平日も開催となったら、足りないのではないかな。

ただ、ひまわりクラブの子どもたちはふれあいスクールに全員参加しているので、ひまわりクラブは留守番を一人置いて、支援員は子どもたちと一緒に全員参加する。平日開催のときは、6～7人の支援員が来るのでとても助かる。

(脇野委員長)

学校で違うと思うが、山田委員のところは、運営主任がボランティアを募集しているのか。ほかの人をお願いして探してもらおうとか、PTAをお願いするとか、いろんな形があるようだが。

(山田委員)

毎月、ふれあいスクールのお便りや配信メールでボランティアを募集している。ボランティアが、一人が一人を連れてきましょう、誘ってきましょうと、合言葉のようにやっている。

豆まきのときのゲームも全部ひまわりクラブの先生に考えてもらい、仕切ってもらおうという方法もやっている。

(脇野委員長)

川口委員のところは、困っている感じではなく健全なところかもしれないが、いかがか。

(川口副委員長)

開設当初の皆さんがいまだにいてくれるが、脈々とつなげていくためにはボランティアの募集をしていかないといつまでもできないと言われている。いつまでこのメンバーに頼ってられるかというのが現実問題である。

少しずつ次世代が入る必要があり、そこが保護者でもいいし、地域のリタイアした人などいろいろあると思う。熱心に始めてくれた皆さんがいまだにつないでくれているうちに、次を考えないとお礼も言えない。頼めば受けてくれるが、年を取ったと言われている。

(脇野委員長)

次にバトンを渡すシステムが大事なのかと思う。長谷川委員のところは、PTAが主体的に探そうとしている。

(長谷川委員)

早い年代でふれあいスクールが立ち上がっていたので、早い段階でリタイアした人から声が上がった。その当時、民生委員が中心になってやってくれたが、もう動けなくなってきたからPTAで何とかしてほしいと言われていたので、課題として取り組んできた。

10年前と今だと、保護者の考え方が違う。子どもたちのためにという気持ちはあるが、昔のように学校の子はみんな自分たちの子みたいな感じではなく、個人主義になってきている。

地域の方を巻き込んでいくのも大事だが、保護者はどうしてもおんぶに抱っこになってしまうので難しい。地域で育てていただくことはとても大事であるが、そこに保護者という軸がないとよくないという問題意識をもっている。

(山田委員)

やっぱりPTAが参加しやすいのは土曜日だと思うが。

(長谷川委員)

習い事が土曜日の午前中に入っているなど、参加する子どもたちの人数が減ってきているため、土曜日は今、縮小になった。土曜日になると、保護者が出てくるかというところでもない。

むしろ、水曜日に学校が早く終わり人数が膨らんでしまうので、月曜日と水曜日は学年で分けて利用している。1・3・5年生が月曜日、2・4・6年生が水曜日、翌月は逆になる。

(脇野委員長)

運営主任研修会および運営委員会とあるが、そこではボランティアの後継者をつくるという話もしているのか。

(事務局)

運営主任研修会は年3回開催し、他校の工夫や苦勞等を情報交換している。運営委員会は学校ごとに行っている年1回の会議である。

そういう観点で情報収集して、汎用性が高い部分があれば、話題提供、情報共有を心掛けたいと考えている。

(加野委員)

ひまわりクラブの職員が留守番を一人残してふれあいスクールに行くというお話があったが、学校によって、子どもたちの様子によってだいぶ違っている。ふれあいスクールで、大きい部屋でワイワイ遊びたい子と、静かに塗り絵とか好きなことをして過ごしたい子が

いると、そこに職員が二人以上はいなくてはいけない。

ひまわりクラブに入会するお子さんの中で、配慮が必要なお子さんは多くいる。障がいをおもちのお子さんもいるし、集団行動が苦手だったり、大きい音が嫌いというお子さんもいる。個別支援の対応も必要になってくると、ふれあいスクールに望まれているのは分かりつつ、なかなか職員もそこまで潤沢にいないという課題がある。

ひまわりクラブは、やはり現状と課題でこども政策課が挙げているとおり、狭あい化は本当に課題になっている。利用率はどんどん上がっているが、スペースは限られている。小学校から部屋を貸してもらうこともあるが、一定の時間だけ借りているので、少なくとも最初とか最後は、本当は 60 人ぐらいの部屋に 100 人いるようなことがあるし、障がいのあるお子さんからすると、大勢の中にいるのが苦痛という子もいるなど、いろんな特性に合わせた対応が難しいという課題があると思っている。

ただ、ふれあいスクールがあることで、みんなで体育館など広いところで遊べるし、いろんな大人と関われるというのはすごくいい体験になる。ひまわりクラブの職員だけと関わるより、いろんな大人と関われる場所があるというのはとてもいいと思う。

利用率が増え、高学年の児童が結構多くなっている。3年生で終わりでもなく、4年生、5年生でもひまわりクラブを使っているお子さんもたくさんいる。それは問題ないが、どんどん狭くなってくると、5、6年生が怖くて1、2年生が伸び伸び遊べないなどの状況は実際起きている。3、4年生、5、6年生が怖くて1、2年生がひまわりクラブに行きたくないとか、狭いからなおのことトラブルが増えたりすることもあるので、狭あい化は課題だと思うし、そこをうまくふれあいスクールと連携できるといいと思う。

5、6年生になって一人で留守番が本当はできるけれど、友達がみんなひまわりクラブに行っているからひまわりクラブを利用するという子もいて、それは構わないが、狭い部分とうまくマッチしていくといい。ふれあいスクールに行って、ある程度の時間になったから自分で帰れるとか、保護者の安心とひまわりクラブの利用のところが課題だと思う。

(山田委員)

上の学年にいけばいくほど配慮が必要な子がひまわりクラブを利用する傾向にあるので、にぎやかなところが苦手だとか、肢体不自由のお子さんもいる。

ふれあいスクールがないときでも体育館を使えるし、特別教室もコロナ禍から継続して借りられるなど、ひまわりクラブも密にならないように貸していただき、恵まれていると思う。

(加野委員)

早く貸してくれる学校がほとんどであるが、働き方改革の関係で4時半には鍵を閉めるなど、ひまわりクラブの子どもたちがまだ 50 人、60 人いたりすると、またひまわりクラブの一室に行かなければならない。学校のやりとりの話で、機械警備や施錠の問題だったりするので、うまく連携できるといいと思う。

(山田委員)

児童玄関を開けて、別の入り口から5時までとしている。

(加野委員)

職員の人数がそこまで確保できていないというのも、一つ課題としてはある。

(長谷川委員)

ひまわりクラブが来年からまた委託業者が変わることに関わり、いろんな事業者の提案を見た。事業者によって全然考え方や規模が違い、できることとできないことがある。

一概にふれあいスクールと連携できるかという、東山の下はひまわりクラブが3か所あり分かれてしまうので難しいとか、いろんな状況はある。それこそ、ふれあいスクールの運営チームと話をして、できるところで連携していければいいと思うが、5年ごとに替わると継続的な連携が難しい。運営の方針が変わったら戸惑うのは子どもたちであり保護者である。子どもたちのためにというところを念頭に置き、できることをやっていくしかない。

CSにふれあいスクールの運営委員会が入るときに、ひまわりクラブの運営主任も入って、放課後お預かりしている子どもたちの状況などを話し合いできたらもっとうまく、子どもたちを地域で育てていけると思った。

(川口副委員長)

受託される組織によって雰囲気は少し違う印象をもっている。会社だと会社の風土というか、それは良い悪いではない。

ふれあいスクールに行って遊んでからひまわりクラブに行くので、ひまわりクラブの職員の皆さんから来てもらうという状況ではない。下校すると、「遊んでからひまわりクラブに行きます」となるので、すみ分けのようなものも一緒に考え、一緒にやれるやれないとか、会社の部分とか、いろいろあると思いつつ、いい勉強をさせてもらった。

(山田委員)

ふれあいスクールでも学校でもひまわりクラブでも、主人公は一緒だと思う。同じ子どもなので、連携できたらいいと思っている。

(脇野委員長)

簡単にいろいろ変えられないと思うが、参考にしてもらって、ほんの一つでも何か改善をしていただければと思う。

(2) その他

## 6 閉会

### 【配布資料】

- ・令和5年度 新潟市放課後子どもプラン推進委員会 次第
- ・令和5年度 新潟市放課後子どもプラン推進委員会 資料